

被災地 衛生どう守る

トイレ ポリ袋を活用

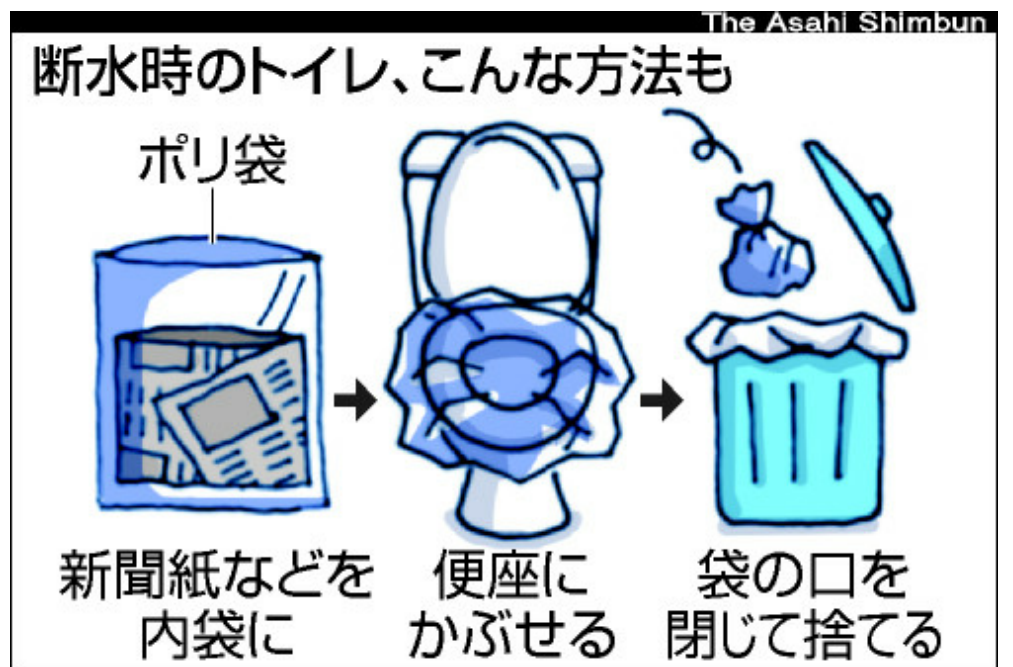
くらしを支えるトイレ。断水で水洗式が使えない被災地では、仮設トイレのタンクが満杯になる場所も出てきている。多くの人たちが身を寄せ合っている避難所や、行政サービスから孤立した自宅で、断水時にどんなことに気をつければいいのか。

災害時のトイレ事情に詳しいNPO法人「日本トイレ研究所」(<http://www.toilet.or.jp/>)の加藤篤所長は、「今回の震災は水害が追い打ちをかけ、最悪の衛生環境に陥りかねない」と懸念する。

加藤さんは、断水時にポリ袋を使う方法を呼びかける。「便器をポリ袋で覆ってから排泄（はいせつ）してほしい。袋には新聞紙などを一緒に入れ、排泄物の水分を吸収させた上で密封する。排泄物は断水が解除されたときに、少しずつ慎重に流してほしい」と呼びかける。

排泄は命を支える大事な営み。共同生活の中でトイレは、安心して1人になれる数少ない場所だ。加藤さんは、トイレの清潔さを保つために、トイレトーパーや除菌シート、生理用パッドや紙オムツなどの衛生用品を被災地へ支援する必要性を説く。

1995年の阪神大震災では、避難所のトイレの個室から排泄物があふれる事態になった。仮設トイレの備蓄が足りず、「数を増やして」という要望が殺到。全国からの支援で75



人に1基にまで増えたころ、ようやく問題は沈静化した。

2004年にあった新潟県中越地震を通じた研究では、仮設トイレが被災者の心理面に及ぼす影響もわかった。トイレの段差や外気の寒さを嫌って、飲料水や食べ物を控え、体調を崩す高齢者が相次いだ。

NPO法人「愛知排泄ケア研究会」理事の泌尿器科医、吉川羊子さんは「決して尿や便を我慢しないで」と訴える。「被災者同士で『トイレはお互い大変ね』と口に出すことで譲り合いの雰囲気も生まれ、清潔に使うマナーが守られる」

このほかにも、転倒などのトラブル予防のために、高齢者や女性同士で声をかけ合ってトイレに行くようにする▽便の細菌による感染を防ぐため、手指消毒剤や使い捨て手袋を使う▽現地入りするボランティアは市販の携帯トイレを持参する——ことが重要だという。